九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

「和解」から「翻訳」へ : Beschryvinge van het octant en deszelfs gebruik の訳出に見る本木良永と志筑忠雄

大島, 明秀
熊本県立大学

https://hdl.handle.net/2324/6769065

出版情報：Journal of the Faculty of Letters, Prefectural University of Kumamoto. 29 (82), pp.94-73, 2023-02. Faculty of Literature, Prefecture University of Kumamoto
バージョン：
権利関係：

「和解（わげ）」から「翻訳」へ

—*Beschryvinge van het octant en deszelfs gebruik* の訳出に見る本木良永と志筑忠雄—

大島明秀

熊本県立大学文学部紀要
第29巻通巻第82号抜刷
2023年2月発行
Reprinted from
Journal of the Faculty of Letters
Prefectural University of Kumamoto
Vol. 29 No. 82 February 2023

「和解（わげ）」から「翻訳」へ

―*Beschryvinge van het octant en deszelfs gebruik* の訳出に見る本木良永と志筑忠雄―

大島明秀

けるる翻訳行為の本質を解き明かしつつ、良永と志筑の訳出姿勢の差異を手掛かりに、それぞれの歴史的位置づけを明らかにする。

はじめに

一八世紀後半、オランダから天文航法用の測量器具であるオクタント（八分儀）の使用法を記したコルネリス・ドウエス（Cornelis Douwes, 1712-1773）の著書『オクタントとその用法の説明書』[1]が日本に輸入され、これを底本として、阿蘭陀大通詞を務める本木良永（一七三五～一七九四）と、阿蘭陀稽古通詞を辞して野にあった志筑忠雄（一七六〇～一八〇六）とが、それぞれに写本で訳出した[2]。

このことを踏まえて、本稿では、第一に、ドウエスの蘭書原文と良永訳および志筑訳を比較し、両者の翻訳の精度や方針を洗い出す。第二に、近世初中期における翻訳行為の本質を解き明かしつつ、良永と志筑の訳出姿勢の差異を手掛かりに、それぞれの歴史的位置づけを明らかにする。

一、『オクタントとその用法の説明書』と本木良永および志筑忠雄の訳出写本

（一）ドウエス『オクタントとその用法の説明書』

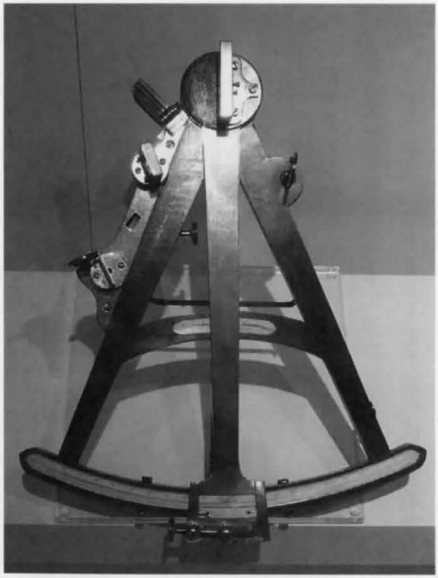
ドウエスはとりわけ航海術の研究と教育で功を成した人物で、一七四八年にアムステルダムの一般船員学校（Algemeen Zeemanscollegie）の教師となり、後に州立海軍士官学校（Edel Moogende Collegie ter Admiraliteit）の数学教員や、海軍士官と航海士の国家

試験官もつとめた。オランダ科学協会の会員でもあったドウエスの学者としての最大の仕事は、正午の太陽の高度によらず地理的緯度を計測する方法を考案したことであろう。[3] また、そのセキスタント（六分儀）を用いた天測と航海表による推測航法の教科書は、ヨーロッパで広く知られ、その航海法は一九世紀まで使用された。[4]

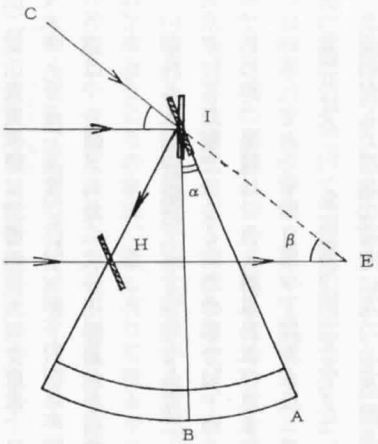
かかるドウエスが著した『オクタントとその用法の説明書』は、器具の調整法や天体の測定法を二六の節にまとめた、いわばオクタントの取り扱い説明書で、その原理や測定目盛りについての記載もない簡素な小冊であった。[5]

初版は一七四九年刊。その他一七六六年版と一七八九年版も確認される。良永は訳出書の末尾に「本書／和蘭暦数一七四九年／コルネールスドウエス著」と記し、底本が初版であったことを明示している。

ここで図二を用いてオクタントの原理と使用法を簡単に説明しておくと、観測者はEから覗き、示標桿IBをスライドさせ（示標桿に連動して鏡H、鏡Iはスライドする）、鏡Hのところで水平線と天体Cとが一致するように動かす。「鏡をある角度回転させると、



図一　一七九〇～一八一〇年頃のロンドン・Spencer, Browning & Rust 社製のオクタント（Kept by Royal Ontario Museum. Creative Commons -CC0 1.0 Universal）。



図二　オクタントの原理図（中村士「天文方の光学研究」〔『天文月報』第九八巻第五号、二〇〇五年〕、三一九頁の図を転載）。

その反射光は二倍の角度回転する」という初等光学の定理から$2\alpha=\beta$が成立するため、円弧AB上に二倍の目盛りを刻んでおいて、そうして天体高度を読み取るようにした測量器具である。[6]

さて、オクタントの伝来時期の確定にあたっては、三浦梅園（一七二三～一七八九）による長崎見聞記「帰山録」（一七七八）の記述が手掛かりとなる。

吉雄［＝耕牛］亭奇貨多し。只此時長崎熱閙、其奇貨を遍く見、其説を詳に尽す事能はず。今に是を憾む。亭上阿蘭陀琴、望遠鏡、顕微鏡、天球、地球、ヲクタント、タルモメートル、其外奇物種々を見る。[7]

右のように梅園が阿蘭陀通詞吉雄耕牛（一七二四～一八〇〇）の自宅でオクタントを見たことを証言していることから、少なくとも一七七八年までに測量器具オクタントは日本に伝わっており、その後一七八〇年代以降にその説明書であるドゥエス蘭書が訳出された。つまり、本木良永や志筑忠雄は決して未知の器具について訳を試みたのではなかった。

(二) 本木良永訳「象限儀用法」

良永の訳出写本を七点確認したところ、内題は認められず、その外題は、①「象限儀用法」(津市立図書館稲垣文庫本、大阪公立大学中百舌鳥図書館A本[8])、②「オクタント用法記(和孤丹多用法)」(日本学士院C本[9]、日本学士院D本[10])、③「八分円儀(八分円儀用法)」(山形大学附属図書館佐久間文庫本、日本学士院A本[11])の三種が認められた。なお、日本学士院B本[12]の外題は、合綴された「六分円器量地手引草」が示されていた。

いずれも本文冒頭に「ヲクタント用法」とあるが、良永が付した題ではなく、この部分はドウエス原文の訳であった。尾題は、佐久間本および日本学士院D本には付されておらず、日本学士院A本は「和孤丹多用法」、残りは全て「象限儀用法」であった。

良永の付した標題の確定にあたって、鍵を握るのは、稲垣本と大阪公大A本にのみ確認できる松村元綱序の存在である。「和蘭地図略説」、「天地二球用法」をはじめとして良永は元綱の助を得て幾度も訳稿を編んでいるが、ドウエス蘭書の訳出にあたってもその助けを借りている。よって、良永訳出の原本は元綱序を備えているものと見てよいだろう。

それでは序を見てみよう。以下、稲垣本を底本とし、大阪公大A本における異同を角括弧で補い、筆者による補足を山括弧で付した。なお、平出は反映したが、人名以外の表記は現在通用する字体に改め、句読点を付した[13]。また、読み下し文を後続させたが、適宜ルビを付すとともに、異同がある箇所については意味が通る方を選択した。

象限儀用法序

西庠(洋)之学有七芸。而度数居其一焉。度者何。曰日星之高度是也。蓋星学之徒(従)、安渾儀置天球以鑑。日月諸曜之運動、初以得極星出地之度。為本故不講究測法、則雖有候天之諸儀無所施其術也。西士之製象限、蓋有視乎此歟。其為器也、長不盈尺而坐致日星之度如諸掌。其智之巧妙可勝而嘆哉。西儒骨爾業斯者著此器之用法一巻。其説詳且悉焉。雖然其言侏離其義艱深。雖吾侑業(訳)訳者不易得其解。茲歳癸卯夏偕蘭皐本氏翻(訳)訳、其書記以国字、其為使(便)観覧也恭惟吾東方世設暦局、重授時之政。済々乎不乏其人。吾

侑[済]為此挙世[也]実近僭焉。雖然若有同志之士、階梯之以臻其原、則豈可不曰裨益斯道哉。訳[訳]語問[間]有重複其恐背馳本書之義。不必刪削観者［呉］恕諸。

天明癸卯夏日躔巨蟹之次　　先鎮晩学松邨[元綱]君紀撰

（西洋の学に七芸有り。而して度数、其一に居す。度は何ぞ。曰く、日星の高度是なりと。蓋し星学の徒、安んぞ渾儀を置いて天球を以て鑑とす。日月諸曜の運動は初めて極星出地の度を得るを以てす。本故講究せざる測法を為せば、則ち候天の諸儀有ると雖も其術を施す所無かるなり。西士の製するところの象限、蓋し有りて視るや此か。其器たるや、長尺に盈たざるも坐致・日星の度を諸の如く掌る。其智の巧妙は嘆くに勝ふべきかな。西儒の骨爾業斯（コルネリウス）、此器の用法一巻を著す。其説詳しくして且に悉さんとす。然りと雖も其言は侏離にして其義は艱深。吾侑の業と雖も訳者は其解を得るに易からず。茲歳癸卯夏、偕蘭皐（らんこう）本氏の翻訳するところ、其国字を以て書記し、其観覧に便せん。恭みて惟ふに、吾東方の世に暦局を設け、授時の政を重んずる。済々乎として其人乏しからず。吾侑此挙を為すや、実に僭るに近し。然りと雖も若し同志の士有らば、階梯の其原に臻（いた）るを以てすれば、則ち豈に斯道を裨益すと曰わざるべけんや。訳語間に重複有りて其本書の義に背馳するを恐る。必ずしも刪削せざれば観者これを恕せ。

天明癸卯夏日躔巨蟹の次　　崎鎮晩学松邨[元綱]君紀撰す）

「象限儀用法序」と命名された元綱序には、「天明癸卯夏日躔巨蟹の次」とあるように、太陽太陰暦で天明三年（一七八三）五月下旬から六月下旬の間に成されたことが明記されている。奥書が「日本天明三年癸卯夏五月」であることを踏まえると、本文訳の成立と同時期か、成立後に序を付したものと見られる。

序には訳稿の成立過程、すなわち本木良永がオランダ語の訳出に当たり、松村元綱が文章を整えたことが語られている。残念ながら訳出の経緯に関する記述は認められないが、良永の仕事に対する姿勢を考慮すると、その背景に幕府や藩主、ないしは有力な役人や商人の要請があったのではないかと推察される。

留意すべきは、序題のみならず序の文章中にも「象

限」という用語が用いられており、その他オクタントを描いた諸図に「象限儀 番名ヲクタント」[14]との見出しがあり、本文冒頭の題にも「ヲクタント用法 漢名 象限儀」と記され、オクタントの訳語として確実に「象限」が当てられていることである。

天文観測機器の一つである「象限儀」(四分儀 Quadrant)は明末の中国に西洋から伝わっており、また、ポルトガル船の航海器具を参考に近世初期の日本でも製作していたという。おそらく訳稿推敲の過程で、元綱は既に存在する機器名を踏まえ、オクタントの訳語に当該用語を採用し、良永が同意したものと見られる。しかし問題なのは、「オクタント」が八分の一を表す語であるのに対し、「象限」は四分の一であることから、明らかに誤った訳となっていることである。ともあれ、かかる訳出の背景については後述することとし、ひとまずここでは良永が付した標題が「象限儀用法」で間違いないことを確認しておく。

(三) 志筑忠雄訳「オクタント之記」

志筑忠雄の訳出写本を八点確認したところ、内題は確認できず、その外題は、①「オクタント之記」(東北大学附属図書館林文庫本)、②「オクタント之記」(名八円義用法)(福岡市博物館本)、③「オクタント」(大阪歴史博物館羽間文庫A本)[15]、④「八円義及其用法之記」(大阪歴史博物館羽間文庫B本)[16]、日本学士院A本[17][扉に「八円儀測量術」]、⑤「八円儀記」(東北大学附属図書館狩野文庫本[見返し剥がれ部分に「オクタント之記」])、⑥「八円儀用法」(日本学士院B本[18][扉に「オクタント記和解」])の六種が認められた。なお、日本学士院C本[19]は標題を備えていない一本であった。

また、良永訳書とは異なり、志筑忠雄のそれはドウエスの標題紙を扉として訳した部分を備えており、志筑はそこでドウエスの原標題を「八円義及其用法之記」と訳し、さらに本文の始まり部分に、「其」を省略した「八円義及用法之記」という題を記しているが、良永の場合と同様に、この部分は志筑が命名したものではなく、ドウエス原文の訳であった。

ところで、当該部分には志筑が底本とした版の書肆名も記されており、「キウレンヨハンネス及ビソーネンヨハンネス」とあるが、これは一七五七年から一七七九年まで表示が認められる Johannes van Keulen en Zoonen を指す[20]。現在確認できるドウエス蘭書の三

つの版のうち、当該期間に刊行されたのは一七六六年版であるが、その出版者名は Johannes van Keulen であり、志筑の示した名と一致しない。よって、志筑が底本とした版は現時点で不明とせざるをえない。

ともあれ、外題こそが志筑の付した標題と目されるものの、前述のように題名は多岐にわたった。ただし、①～⑥を大別すると、「オクタント之記」と「八円義及其用法之記」の二種に落ち着く。そしてこのうち後者が、志筑訳書冒頭でドウエス著書の標題を訳したものと文言が一致することから、何らかの理由で外題を失った写本に、書写者か入手者が本文中から題を取り、後から外題を付しなおしたものと見られる。したがって、志筑が付した標題は前者「オクタント之記」と考えてよい。

さて、写本①～⑥は志筑序を備えており、その年紀・署名は「寛政十年午仲夏［＝一七九八年五月］志筑忠雄書」[21]である。当該時期は志筑の生涯において最重要の研究対象であった「暦象新書」の中編の訳述に取り組んでいる期間と重なることを勘案すると、本木良永「象限儀用法」からほぼ一五年を経て成された志筑忠雄「オクタント之記」は、「暦象新書」訳出と並行して片手間に行った仕事であった。

かかる写本群の中で注目すべきは、志筑忠雄跋文を備えた三本である。東北大林文庫本、福岡市博本、そして大阪歴博B本である。前二者は志筑跋のみならず、その門人安部龍平（一七八四～一八五〇）の跋文を有しており、さらに福岡市博本には裏表紙に「安部記」という識語が認められ、安部龍平の自筆に遡る一本であることを窺わせる。[22]

以上の三本のうち、東北大林文庫本は明らかな誤記が少なくないため、以下、福岡市博本を底本とし、羽間B本で校訂した志筑忠雄の序と跋を掲げる。なお、校訂は「象限儀用法」序の方針と同様に行う。[23]

［序］

オクタントは測象の器の名なり。いまた漢人これを如何か名つくると云ふことをしらす。いさ八円儀と訳することは、其語全円の八分一なる測器といふ意なるをもて、聊其義をとるのみ。

寛政十年午仲夏　　志筑忠雄書。

［跋］

予いまた是書にいへるオクタントを見されは、右のことく本文の意を解せりといへとも実は臆度推量の言といふへし。然れとも今鏡二つたにあらは如何なる鏡にもせよ、これをもつて(取り)試んにもオクタント反照変化の理(理は)、目前に明白なるへし。況や予か見しオクタントを此(是)書に比ふるに、丙鏡の形も異にして幅を調ふるの螺旋もなきなとの故障はありしかと、これをもて遠きを見、近きを見、或は甲鏡を起して幅の違を試みなと様々にして見しをや。此を推(お)して彼に達するの理あれは、何そ必しも知へからすとのみはいひてん(む)。

跋文で志筑は、ドウエス蘭書に描かれたものとは別種のオクタントを見ていたことや、器機の実物を見ずに取り組んだ自身の訳が推測に基づくものであることを述べている。それ以上に重要なのは、末尾の「此を推して彼に達するの理あれは、何そ必しも知へからすとのみはいひてん」で、ここで言う「彼」は遠称の指示代名詞で、西洋あるいは西洋人を指すものと見られ、志筑の訳出動機が西洋科学の摂取にあったことが窺える。

ただし不審なのは、良永の訳出に言及がないことである。志筑忠雄は短期間ではあったが阿蘭陀稽古通詞に就いており、その上、通詞辞職後に戻った実家の商家中野家は本木家と同じ外浦町に所在した。さらにオランダ語翻訳界隈が狭い世界であることを考えると、志筑が良永の仕事を知らなかったとは想定しがたい。この疑問を含みつつ、ドウエスの原典と突き合わせて、良永と志筑の訳出を比較検討していこう。

二、本木良永と志筑忠雄の訳文

(一) 訳語の相違

Octant に対する良永訳[24]は「象限」もしくは「オクタント」であるが、志筑は「オクタント」ないしは「八円儀」と訳している。既述したように、Octant は八分の一を指すことから、四分の一を意味する「象限」は訳語として不適切である。

また、オクタントを図示した個所では、その指標に対し、良永は「空度」、「四十度」、「九十度」を記すのに対し、志筑は「無度」、「四十五度」、「九十度」を示す。また、オクタントに備えられた諸鏡を「甲」、「乙」、「丙」といった十干で示すのは両者同じであるが、人間の着

眼箇所についても良永が「丁」、「戊」と十干で表現するのに対し、志筑は「子」、「丑」と十二支を用い、読者が混乱しないように分けて表している。

オクタントの示標桿を指すWyserあるいはIndexに対して良永は「游表」としているが、「游表」は蘭尺定木という高精度の木製定規の上に備え付けた、寸法を測るためにスライドさせて使用する副尺の名である。確かにオクタントの示標桿も数値を出すために動かして使用するという意味では「游表」と一致する点もあるが、しかし外観、使用法ならびに働きが全く異なるものであり、読者の誤解を招く訳語である。一方、志筑は「運楗」と造語している。移動させることを意味する「運」と、水を堰き止める木の柱を指す「楗」をもって訳出したのである。特に「楗」については、オクタントが航海用器具であることから、「水」に関係しつつ「柱」を意味する語として採用したのであろう。

その他、良永が訳せなかったGraadboog en Kruissen（クロススタッフ）、Quadrant（象限儀、四分儀）についても志筑は訳出に挑んでいる。前者については「弩儀」という訳語を当てているが、松宮観山（一六八六～一七八〇）「分度余術」（東北大学附属図書館林文庫蔵）に用例があり[25]、先例に倣ったのかもしれない。

その一方で、後者を「星尺」と訳しているのは不審である。Octantを正しく認識しながらQuadrantを理解できなかったとは考えられない。そこでかかる訳語に至った経緯を検討すると、Octantは航海用の測量器具であるのに対し、Quadrantは天体の高度を観測するための天文観測機器であり、その用途は全く異なる。しかし、器具名を直訳するだけでは、読者は両者を弧の角度が異なるだけのものと誤解しかねない。よって、その用途を明確に示すために、あえて「四分の一」であることを表さず、「星尺」と訳したのだと考えられる。

かように志筑もいくつかの訳語には苦労したようであるが、重要なのは、原文を省略したり改変したりせずに、あくまで原文の尺や意味を損なわないよう、忠実に日本語に置き換えることに臨んだその姿勢である。

（二）訳文の精度

ドウエス蘭書の第一節を例に、良永と志筑の訳を比較してみよう。なお、ドウエスの蘭文には拙訳を後続

させた。

［ドウエス蘭書・第一節］

HET Octant waar van wy zullen spreken, is het geen meest in gebruik is, met drie Spiegels. Waer van het Maakzel, Grootheid, en Houding in Fig. I. vertoond word. Andere zoorten van Octanten, by andere uitgevonden, als minder in gebruik zynde zullen wy niet aanhaalen.（これから話すオクタントは、最も一般的に使用されているもので、3つのミラーを備えているものである。図1には構造、大きさ、および外観が示されている。他の人が発明した他の種類のオクタントは使用が少ないものとして引用しない。）

［良永訳］

爰ニ説ク所ハ、三鏡アルオクタントの用法并ニ其大小ニ従フ製造ノ方ナリ。其図初メニ著スカ如シ。此器ニ別種アリ。是他人ノ製スル所ニシテ、其蓋少シ故[故ニ]コヽニ載セス。[26]

［志筑訳］

今我言ントコロノ八円儀ハ、多ク世間ニ用ラル、者ニシテ、三ノ鏡ヲ帯タリ。其状、其大サ及ヒ其附属ノ諸件並ニ図ノ一ニ見タリ。他人ノ発明セル他種ノ八円儀ハ世ニ用ルモノ少ケレハ此ニ説ス。

一瞥して志筑訳の正確さが見て取れるが、良永訳を詳細に見てみると、まず第一文では meest（最も）の訳が脱落しており、さらに in gebruik is（使用されている）を「用法」と誤解しつつ、さらには「并ニ其大小ニ従フ製造ノ方」という文を付して拡大解釈している。続く第二文に至っては、「図1に […] 示されている」という内容を、「其図初メニ著スカ如シ」と少しく文章を変更するほか、比較級を用いた minder in gebruik（使用が少ない）には、第一文で in gebruik を訳出しておきながら、「其蓋少シ」と、使用ではなく、その物自体が少ないことを意味するような曖昧な日本語を当てている。

それでは次に、第九節の第一項と第二項を見てみよう。

［ドウエス蘭書・第九節第一項］

Laat van eenige hoogte een Loodlyn afhangen, hoe hooger hoe beeter.（垂線をある程度の高さから下ろす。高いほど良い。）

［良永訳］

垂線ヲ最高所ニ設ク。[27]

［志筑訳］

高キ処ヨリ直線ヲ下ス。愈高ケレハ愈ヨシ。[28]

ドウエスの原文は、「垂線をある程度の高さから下ろす」という主節と、比較級を用いて「高いほど良い」という内容を意味する副詞句から成る。ところが良永訳は、これらをまとめた曖昧な内容となっており、誤訳と言って差し支えない。また、「垂線ヲ最高所ニ設ク」という訳文自体、いまひとつ意味の通らない日本語である。

［ドウエス蘭書・第九節第二項］

Plaast het Octant op een afstand van 20 à 30 Voeten van de Loodlyn, in een Loodregte stand.（オクタントを垂線から二十から三十フィート離して、垂直の位置に置く）

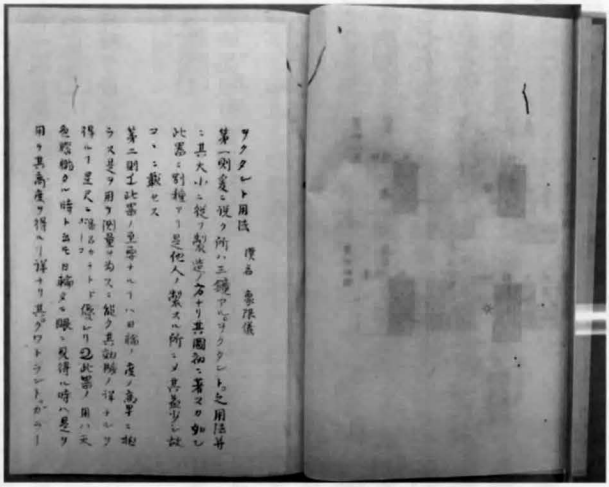
［良永訳］

垂線ヲ距ル[ン]事二十尺及三十尺ニシテ、其中間ニコノ器ヲ竪ニ居エ、眼ヲ丁ニ当テ、前ニ在ル垂線ヲ乙鏡ヲ以テ視ルニ、前後ノ垂線一直線ナルヤウニスヘシ。

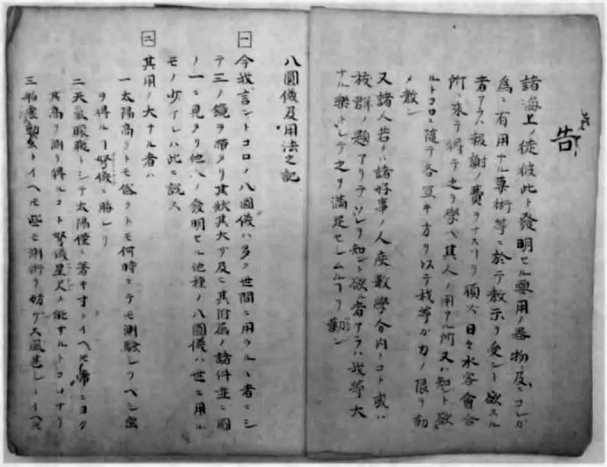
［志筑訳］

器ヲ持テ直線ヲ去ルコト二丈モシクハ三丈ノ処ニイタリテ、コレヲ正立セシム。

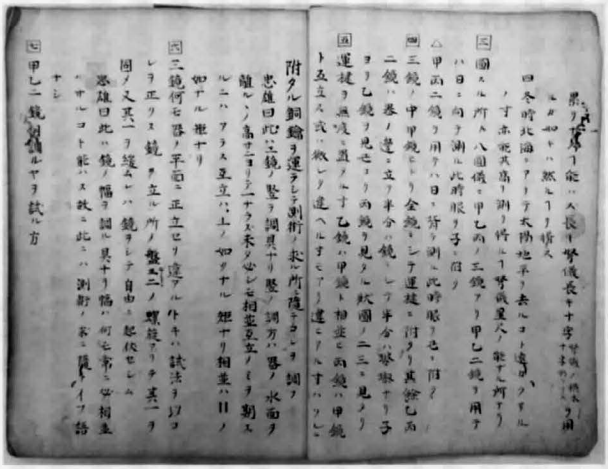
オクタントの位置と垂直に設置することを説いた短い原文に対し、良永は全く尺が合っていない訳文を示している。ここで最も深刻な問題は、訳の誤りというより、原文には無い「其中間ニ」および「眼ヲ丁ニ当テ、前ニ在ル垂線ヲ乙鏡ヲ以テ視ルニ、前後ノ垂線一直線ナルヤウニスヘシ」という文を挿入している行為である。



図三　本木良永「象限儀用法」本文冒頭（津市図書館稲垣文庫蔵）。



図四—一　志筑忠雄「オクタントヲ之記」本文冒頭（福岡市博物館蔵）。良永訳出本とは異なり、節と項の順序を示す数字を見出し状にし、さらに章については四角（□）で囲む一方、項は数字のみを記して高さを下げて区別するなど見やすく仕上げている。なお、右葉の「告」とは、ドウエス蘭書に序のように付されたBericht（知らせ）部分の訳である。



図四―二　志筑忠雄「オクタント之記」二節三項からの続き（福岡市博物館蔵）。ドウエス原文を損なわないよう、志筑による加筆部分については「忠雄曰」と述べた上で高さを下げて示している。また、三角印（△）は原文が改段落していることを表している。

ここまで見たように、原文に対する志筑の訳出姿勢と比較すると、脱落や誤訳もさることながら、良永のそれは、原文を自身の解釈で表現しなおす態度と言える。誤訳であればいざ知らず、故意に原文の意味を変更したり、文を脱落させたり、あるいは言葉や文章を勝手に挿入したりするような訳出は、少なくとも現代の意味における「翻訳」と同じではない。しかしながら、我々はその良永の姿勢に、オランダ語に対する不理解や読解力の不足のみならず、そもそも近世における訳業が、今日の「翻訳」とは全く異なる営為であったことを見出しうるのではなかろうか。

三、「和解」から「翻訳」へ

「蘭学者」として人口に膾炙する杉田玄白（一七三三～一八一七）は、版本『解体新書』（一七七四）の「凡例」において、自身の訳述について次のように述べている。

訳有三等。一曰翻訳。二曰義訳、三曰直訳。如和蘭呼曰価題験者即骨也。則訳曰骨。翻訳是也。又如呼曰加蝋仮価者。謂骨而軟者也。加蝋仮者。謂

如鼠囓器音然也。蓋取義於脆軟。価者価題験之略語也。則訳曰軟骨。義訳是也。又如呼機里爾直訳者。無語可当。無義可解。則訳曰機里爾直訳是也。余之訳例皆如是也。読者思諸

（訳に三等あり。一に曰く翻訳、二に曰く義訳、三に曰く直訳。和蘭呼びて価題験（ベンデレン）［beendelen］と曰ふ者は、即ち骨なり、則ち訳して骨と曰ふが如きは、翻訳これなり。また、呼びて加蝋仮価（カラカベン）［kraakbeen］と曰ふ者、骨にして軟かなる者を謂ふなり、加蝋仮（カラカ）なる者は鼠の器を囓む音の如く然るを謂ふなり、蓋し義を脆軟に取る、価（ベン）なる者は価題験（ベンデレン）の略語なり、則ち訳して軟骨と曰ふが如きは、義訳これなり。また、呼びて機里爾（キリイル）［klier］と曰ふ者、語の当つべきなく、義の解すべきなきは、則ち訳して機里爾（キリイル）と曰ふが如きは、直訳これなり。余の訳例は皆かくの如きなり。読む者これを思へ）[29]

玄白は訳を、①「翻訳」、②「義訳」、③「直訳」の三種に分け、①は現在で言う直訳、②は借用語としての処理あるいは意訳を指し、③は置き換える言葉が無い際に、音のみを記述する外来語としての対処を意味する。

かように玄白は訳の在り方を意識していたが、あくまでこれは「語」のレヴェルの対処であり、意識であった。『解体新書』における最大の問題点は、蘭書原典に付されたクルムス（Johann Adam Kulmus, 1689-1745）の注釈が無視されていること、原文には無い記述を追加していること、そして様々な書物から図を集めたりして作られたことにある。[30] さらに言えば、本文はいわゆる欧文訓読、すなわち漢文体で表記されているが、この文体に置き換えることを「和訳」と呼んで良いのだろうか。

文体で言えば、大槻玄沢（一七五七～一八二七）による蘭学入門書『蘭学階梯』（一七八八）の文例を眺めると、Ik wensch u goeden dag myn heer.[31] というオランダ語文の一つ一つの語に、「我　望　你　吉　日　君　吾」と訳語を提示しているが、二人称 u に当てた「你」は白話であり、もはや漢語でもない。こうなると、ますます「日本語訳」や「和訳」と呼ぶのは難しい。「語」ではなく、「文章」のレヴェルで翻訳行為を表す近世初中期の語彙に「口和（くちやわらげ）」と「和解（わげ）」がある。「口

和」は『日本国語大辞典』第二版（以下『日国』）には、用例無しに「外国語を日本語に翻訳することを古くいった語。とくにオランダ語を通訳すること。和解。」と説かれるが、「口和」を標題に冠した作品の内容を確認する限り、原文に対して忠実に日本語に置き換えた仕事ではなく、右の『日国』の説明は適切ではない。

一例として、カスパル流外科を伝えたことで知られる唐津土井藩の医師河口良庵（一六二九～一六八七）の医書「諸薬口和」を挙げてみよう。良庵がカスパル・シャムベルゲル（Caspar Schamberger, 1623-1706）の直接の指導を受けたかどうかは定かではないものの、写本「諸薬口和」は出島商館からの情報を熱心に収集したり、勉強したりした成果の一つであった。[32] 良庵は、一つの本や原文に対してこれを忠実に日本語に置き換えた「翻訳」ではなく、伝聞や様々な文献の抜き書きなどの諸情報を交え、自身で消化、解釈した内容を説明した書物を編んだのである。

ここで『日葡辞書』を引くと、「口」は「言葉」を、[33]「和（やわらげ）」は「解釈」や「説明」を指す。[34] 要するに「口和」とは、あくまで「（外国語などの）難解なものを（日本人）読者に解釈して説明する行為」であり、現代の意味での「翻訳」を意味しないのである。

それでは「和解」が意味するところは何か。再び『日国』を繙けば、天華蔵主人『通俗酔菩提全伝』（一七五九）などを用例に、「他の国の言語を日本語で解釈すること。また、むずかしい文章や文字をわかりやすく解き明かすこと。また、その解釈。」とある。留意すべきは、『日国』では「和解」を「解釈」や「解き明かすこと」とし、「翻訳」とは認識していないことである。

近世初中期において「和解」を標題に冠した書籍を探索すると、多くは仏書や医書に用いられたようである。例えば、版本『往生要集和解』（一七一五）は、諸書の引用を交えて源信「往生要集」（九八五）を読み解いて説明した一書であった。あるいは『本草和解』（一六九八）は、その序で、曲直瀬道三（一五〇七～一五九四）が成した『霊宝薬性能毒』の誤謬を正し、その不足を補うことを掲げた本草書であるが、中国本草書の純然たる翻訳ではない。本草のいろは分類を行ったり、適宜図解を交えたりするなど、それ以前より簡明に本草の知識を整理して読者に提示するために編まれた書物であった。

また、本草学者野呂元丈（一六九四～一七六一）が

編纂した「阿蘭陀本草和解」(一七四二〜一七五〇)は、八代将軍徳川吉宗(一六八四〜一七五一)の命を受けてドドネウス(Rembertus Dodonaeus, 1517-1585)『草木誌』蘭語版[35]を和訳したもので、蘭書訳出書に「和解」が冠された最も早い例であった。その内容は『草木誌』の項目や記述の抜粋であり、植物の性質についての説明は所々で中医学書の概念や書式に基づいて記されており、さらには八回にわたって江戸参府のオランダ人医師に質問して得た内容を含むなど、純然たる「翻訳」からは程遠い内容であった。

「口和」と同じく、二種の漢字から成る「和解」を一文字ずつ検討すると、「和」が「日本」、「説明・解釈」のいずれを意味するかは判然としないものの、「解(げ)」は「和(やわらげ)」と同じく、「説明すること。解釈すること」(『日国』。用例は「法華義疏」〔七世紀前半〕など)を意味し、やはり先述した『日国』の「和解」の説明と一致する。

ここにおいて、「和解」の本質も「翻訳」ではなく、訳者が提供対象と(して想定)する日本人読者に対し、「難解なものを説明する行為」であったと言える。よって、そこに原文の尊重という概念は存在せず、含まれる内容のみが重要なのであり、必要であれば著者の解釈を交えたり、伝聞情報や諸書の抜き書きを挿入したりして読者への「説明」を作り上げることが「口和」であり、「和解」であった。[36]

このことを念頭に置くと、杉田玄白をはじめとする蘭学者の訳業の本質が了知できるとともに、ドウエス蘭書の訳出において、「和解」に取り組んだ本木良永に対し、「和解」を脱して現代の意味での「翻訳」に臨んだ志筑忠雄の仕事が理解できよう。[37]

ただし、志筑作品の中で「鎖国論」(一八〇一)だけは、例外的に原文の色合いを変容させて訳を成している。[38]志筑忠雄の仕事の位置づけを定めるため、最後にこの点を考察しておく。

例えば、志筑は「鎖国論」本文に小文加筆や付注を行っているが、そこには中華思想に基づく用語や排外的な内容を含んだ言葉が少なくない。鳥井裕美子は、その背景に志筑のナショナルな文脈での日本中心的思考が存在する可能性を見ているが、[39]「鎖国論」成立から五年後、清朝中国とロシアが近代国際法に基づいて国境を画定したネルチンスク条約締結の経緯を訳出した「二国会盟録」[40](一八〇六)ではかような変更は行っておらず、鳥井説が早計であることは否めない。

西洋人の植民地活動に対する反発心や嫌悪感を有していたことは脇置き、志筑のその他の心境を推し量る上で手掛かりになるのは、平戸藩松浦静山（一七六〇～一八四一）との関係である。「鎖国論」の底本は、静山蔵のケンペル（Engelbert Kaempfer, 1651-1716）『日本誌』蘭語一七三三年再版[41]と目され、[42]完成した「鎖国論」は当然静山の手に渡ったことが想定される。先に静山の命で様々な蘭書訳出に従事していたのは本木良永であったが、[43]いつしか志筑忠雄も訳者の一員に加わった。[44]志筑は、若くして阿蘭陀稽古通詞を辞職して野にあり、仕官への願望を抱いていたようである。[45]かかる事情を勘案すると、志筑が自身の翻訳へのこだわりを殺し、原文の文脈を損なう形で中華思想に基づく用語や排外的な言葉を使用した背景には、平戸藩への登用の願望から、ないしは静山を通じて幕府や藩主などの有力者に「鎖国論」が読まれ、そこから仕官の声がかかることを意識して成稿した事情が想像されるのである。[46]

おわりに

以上、ドウエス蘭書『オクタントとその用法の説明書』に対する本木良永と志筑忠雄の訳出本を題材とし、両者における翻訳の精度や姿勢の差異を浮き彫りにするとともに、それぞれの歴史的位置づけを明らかにした。

良永の訳は誤りが多いものであったが、それにとどまらず、自身の解釈で原文の意味するところを変更したり、省略したり、あるいは原文には無い記述を追加したりと、その仕事はあくまで日本人読者に向けての説明行為としての「和解」であった。

一方、志筑忠雄は原文を尊重した忠実な姿勢で、その尺と意味を正確に日本語に置き換えることに心を砕いた。自身の説明を挿入する際は、その部分を割注や頭注にするか、長い場合は字下げの書式で「忠雄曰」と示して明確に区別し、原文を損なわないよう努めた。また、管見の限り、四〇点以上に及ぶ著書において、自身の翻訳行為を「和解」と呼ばず、「訳」を用いて表現した態度にも、「和解」を脱した「翻訳」への自覚が窺えよう。

志筑が良永訳に言及しなかったのは、平戸藩との関係から良永に対抗心を抱いていたことに起因するのか、訳者として相手にしていなかったのか、それとも

訳書を本当に知らなかったのか、その理由は判然としない。しかし、この事実から両者は師弟と呼べるような関係ではなかったことが見て取れるだろう。[47]

いずれにせよ、志筑の訳業は非常に精度が高く、何より現代の意味における「翻訳」と同じ意識で臨んだ営為であった。ここにおいて、志筑忠雄は日本史上初めて外国語(欧語)を「翻訳」した人物と言える。

志筑は革命的な蘭文法書および蘭文和訳論を書き上げたことは周知されてきたが、ここまで見てきたように、「翻訳」に臨む意識や姿勢の在り方もまた同時代を遙かに凌ぐものであった。没後、門人たちの活躍を通じて志筑蘭語学は徐々に普及し、日本人学者のオランダ語力を飛躍的に向上させた、[48]その一方で、蘭書を主とした洋書翻訳機関として幕府天文方内に設置された「蕃所和解御用」(一八一一)の名称や、オランダ国王ウィレム二世(Willem II, 1792-1849)が発出したいわゆる「開国親書」(一八四四)の和訳の標題など、少なくとも幕府当局のオランダ語翻訳業務に係る機関名や書名には、依然として「和解」が用いられ続けた。[49]

明治に至っても「和解」という日本語の含意するところは、旧来の「解釈」や「説明」のままであった。加えて、そもそもオランダ語の通訳・翻訳を行いうる人間が稀少であったこと、文化的差異により蘭語から日本語への正確な置き換えが困難であったこと、特に通詞がしばしば高度に政治的な判断を有する局面に立たされていたことなど各種の背景から、オランダ語に対する訳業の本質は、志筑以降も原文を忠実に日本語に置き換えた純然たる「翻訳」の作成ではなく、訳者が提供対象と(して想定)する、幕府当局をはじめとした日本人に対する「訳者の解釈に基づく説明」であり続けたようである。[50]

注

1 Cornelis Douwes: *Beschryvinge van het octant en deszelfs gebruik*, Amsterdam, Joannes van Keulen, 1749, 1766. Amsterdam, G. Hulst van Keulen, 1789. なお、印刷資料は二重括弧で、写本など手写資料は鍵括弧で示した。以下同。

2 良永は「本書/和蘭暦数一七四九年/コルネールスドウエス著」とあることから初版を底本とした。後述するように、志筑忠雄が用いた版は、注1に示した三つの版ではない。ただし、志筑の訳文は、ドウエス蘭書初版

（一七六六年版も同文）の文章の尺と意を正確に反映した訳となっていることから、本稿では初版を底本とした。

3 Cornelis Douwes: Verhandeling, om buiten den middag op zee de waare middags-breedte te vinden. 1754.
ドゥエスの略歴は、Ernst Crone: *Cornelis Douwes, 1712-1773 : zijn leven en zijn werk, met inleidende hoofdstukken over navigatie en zeevaart-onderwijs in de 17de en 18de eeuw*. H. D. Tjeenk Willink & Zoon, 1941. 中村士「天文方の光学研究」（『天文月報』第九八巻第五号、二〇〇五年）、三二二～三二三頁を参照。

5 前掲中村士「天文方の光学研究」、三一九頁。なお、中村論文はオクタントの受容史を概観したものであるが、写本校合はなされておらず、また、翻訳行為という視座から、本木良永「象限儀用法」および志筑忠雄「オクタント之記」の位置づけを追究した研究ではない。

7 前掲中村士「天文方の光学研究」、三一九頁。

8 「帰山録」上（梅園会編『梅園全集』上巻、名著刊行会、一九七〇年）、一〇六六頁。底本の表記は現在通用する字体に改め、適宜句読点を付した。
同館にはもう一本の「象限儀用法」が所蔵されているが未見。よって、閲覧した一本を大阪公大A本、未見の一本をB本とした。

9 請求記号、七五六二。

10 請求記号、七五六三（一）。

11 請求記号、六四一三。

12 請求記号、六四九五。

13 以下、「象限儀用法」引用の際の底本と校訂方針も同。

14 この見出しは稲垣本には記されているものの、大阪公大A本には確認できない。

15 請求記号、羽一一二―一。以下、羽間A本。

16 請求記号、羽一一二―二五。以下、羽間B本。

17 請求記号、六四一一。

18 請求記号、六四一二。

19 請求記号、七五六三（二）。

20 Gerrit Dirk Bom: *Bijdragen tot eene geschiedenis van het geslacht "Van Keulen" als boekhandelaars, uitgevers, kaart- en instrumentmakers in Nederland*. Amsterdam, H. G. Bom, 1885.
（Koninklijke Bibliotheek 蔵）冒頭に掲げられた Van Keulen 家の系譜を参照。

21 羽間A本のみ、年紀・署名が「午仲夏　忠雄書」。

22 安部龍平跋文は「右志筑忠雄所訳也。忠雄、字季飛、号柳圃、称忠次郎。前紅毛舌人、後更中野氏。龍識。」とのみある。

23 以下、「オクタント之記」引用の際の底本と校訂方針も同。

24 正確には良永訳・元綱校訂であるが、便宜上良永訳とした。以下同。

25 平岡隆二「「測量秘言」の写本について」（『長崎歴史文化博物館研究紀要』第六号、二〇一二年）、注二一。

26 稲垣本では「オクタント」の前後に丸印の読点が付されているが、ここでは反映させなかった。

27 大阪公大A本では語義が「設ケ」と連用形になっているが、ここでは反映させなかった。

28 福岡市博本では一つ目の「愈」に「イヨイヨ」と読みが付されているが、ここでは反映させなかった。

29 『解体新書』「凡例」（『洋学』下、岩波書店、一九七二年）、三二二頁。読み下し文は、本書二一七～二一八頁を参照。原文、読み下し文ともに、新字に改めたほか表記・訓点・句読点は底本に従ったが、オランダ語に対する当て字以外のルビは省略した。

30 拙著『蘭学の九州』（弦書房、二〇一二年）、一八頁。

31 この例文は、前野良沢『蘭訳筌』（一七八五年八月）から援いたもの。鳥井裕美子『前野良沢 生涯一日のごとく』（思文閣出版、二〇一五年）、八三～八四頁。

32 ヴォルフガング・ミヒェル「カスパル・シャムベルゲルとカスパル流外科（上）」（『日本医史学雑誌』第四二巻三号、一九九六年）、四六～四八頁。

33 Cuchi. [...] Lingoagem de qualque reyno.（口。[…] 何れかの国の言語）。*Vocabulário da Lingua do Japão*, Supplemento, 1604, 342r. 底本は、亀井孝解題『日葡辞書』（勉誠社、一九七三年影印版）を使用。なお、和訳に当たっては、土井忠生、森田武、長南実編訳『邦訳日葡辞書』（岩波書店、一九八〇年）を参照した。以下同。

34 Yauarague. Explicação, ou declaração.（和らげ。解釈、あるいは説明）。*Vocabulário da Lingua do Japão*, 1603, 318v. 元丈が底本としたのは、一六一八年版（Rembertus Dodonaeus: *Cruydt-boeck*. Leiden, Plantijnsche Druckerije van Françoys van Ravelingen, 1618.）と目される。

35 同様に、日本イエズス会が上梓した訳書も「翻訳」と呼びうる仕事ではない。例えば、和訳書と紹介される『天草版伊曾保物語』（一五九三）は、説教を目的として編纂されたもので、原典を忠実に日本語に置き換えた作品ではない。原典からの改変については、濱田幸子「『伊曾保物語』成立についての一考察—イソポの伝記を中心に」（『佛教大学大学院紀要 文学研究科篇』第三九号、二〇一一年）など参照。なお、先に杉田玄白『解体新書』から援いたように、近世日本には「翻訳」という言葉も認められるが、「和解」の方が遥かに一般的である。玄白が示したように、「翻訳」という言葉が対象とするのは主に「語」のレヴェルで、異言語の単語に対応する日本語を提示することを言う。時折「文章」のレヴェルで「翻訳」が用いられる用例も確認できるものの、『日葡辞書』に Fonyacu. Explicar algũa cousa por outra lingua, outraduzir em outra lingua.（物事を他国語で説明すること。または、他国語に移しかえること）とあるように、やはり現代の意味での「翻訳」とは異なり、「口和」や「和解」と同じく説明行為であった。*Vocabulário da Lingua do Japão*, 1603, 102r.

36 良永の訳書には「和蘭永続暦和解」「和蘭海鏡書和解」「万国地図書和解」「日月圭和解」など書名に「和解」を冠したものが少なくない。一方、これまでに志筑忠雄の訳書名に「和解」は冠したものは発見されておらず、書名にも両者の意識の差が見える。

37 「鎖国論」については、拙著『「鎖国」という言説—ケンペル著・志筑忠雄訳『鎖国論』の受容史—』（ミネルヴァ

38

書房、二〇〇九年）参照。

39 鳥井裕美子「ケンペルから志筑へ―日本賛美論から排外的『鎖国論』への変容―」（『季刊　日本思想史』第四七号、一九九六年）。

40 底本は松浦静山旧蔵プレヴォ『旅行記集成』（Antoine François Prévost d'Exiles: *Historische beschrijving der reizen*. Amsterdam, de Wed. S. Schouten en Zoon, J. Hayman, J. Roman, G. de Groot, J. Loveringh, G. Tielenburg, S. van Esveldt en G. van Huissteen, 1760.）その第一一巻第八章について第二節を中心に訳した。

41 Engelbert Kaempfer: *De beschrijving van Japan*. Amsterdam, Jan Roman de Jonge, 1733. 静山旧蔵本については、松田清『洋学の書誌的研究』（臨川書店、一九九八年）、四八六～四九三頁参照。

42 前掲鳥井裕美子「ケンペルから志筑へ―日本賛美論から排外的『鎖国論』への変容―」、一一七頁。

43 例えば、「太陽窮理了解説」（一七九二）の訳出は静山の命による。

44 時期は不明であるが、静山は志筑に『字義的・実践的聖書釈義』（Matthew Henry: *Letterlyke en praktikale verklaring over den geheelen Bybel of het oude en nieuwe Testament*. Delft, Reinier Boitet, 1741）の和訳を命じている。前掲松田清『洋学の書誌的研究』、四七三～四七七頁。

45 拙稿「志筑忠雄の所用印ともう一つの字」（『文彩』第一六号、二〇二〇年）、一二頁。

46 岩崎奈緒子は、幕府に対する静山蔵洋書の貸借や、幕閣の中枢にあった若年寄堀田正敦（一七五五～一八三二）と静山との私的な繋がりの深さといった状況証拠から、「鎖国論」の訳出を、ロシアの通商要求を受ける必要が無いことを、静山を介して幕府に提言することを意図した志筑忠雄の政治的行動と推測するが、証拠はない。『近世後期の世界認識と鎖国』（吉川弘文館、二〇二一年）、二二二～二二五頁。

47 古賀十二郎は「本木氏ノス、メヨリ　天文学ノ研究ニ志シナリト。吉雄圭斎談リシ由。　大槻氏［＝大槻如見］談。」と述べている。古賀十二郎「玉園雑綴」五五（手稿、鉛筆、長崎歴史文化博物館蔵）、一一頁。修正前の記述は省略し、古賀の朱や訂正などを反映させた形で記した。拙稿「志筑忠雄の所用印ともう一つの字」（『文彩』第一六号、二〇二〇年）、一〇頁。

48 志筑蘭語学の革命性については、拙稿「蘭文和訳論の誕生―志筑忠雄「蘭学生前父」と徂徠・宣長学―」（『雅俗』第一八号、二〇一九年）や前掲拙著『蘭学の九州』など参照。

49 訳者は渋川六蔵（一八一五～一八五一）。写本によって標題は以下に挙げるように様々であるが、いずれも「和解」を含んでいる。「和蘭告密和蘭国王書簡并献上物目録和解」（『力石雑記』北海道大学附属図書館蔵）、「阿蘭国王呈書和解」（大阪歴史博物館羽間文庫蔵）、「阿蘭陀国王書簡之和解」（武雄市図書館・歴史資料館）など。

50 例えば、オランダ国王が幕府と交渉するには「長崎口」を通すよりほかなく、その意向や文書が幕府に届くまで

に、オランダ商館長、阿蘭陀通詞ならびに長崎奉行の情報操作を経ていた。松方冬子『オランダ風説書と近世日本』(東京大学出版会、二〇〇七年)「第六章　一八四四年オランダ国王ウィレム二世の「開国勧告」の真意」一七五～二〇八頁参照。

【付記】本稿の構想の一部は、拙著『蘭学の九州』に対し、ヴォルフガング・ミヒェル先生および平岡隆二先生から賜った有益な御指摘や問題提起に基づいて成された。記して感謝申し上げます。また、画像の掲載許可を下さった関係諸機関にも深謝します。